

第二節 災害と飢饉

表5-81 天明年間の災害の内容

年次	月日	内 容
天明2(1782)	5. 4	風雨、御城下・矢野・保内組 損田4反余、畑140町4反余(宇和島領)
	7. 3	大風雨(宇和島領)
	" 17	洪水(宇和島領) } 損田744町余、畑364町余(宇和島領)
" 22-23	強雨、矢野・保内・津島組洪水 } 流死2人 肱川増水(大洲領)	
" 3(1783)	8. 19-20	洪水 損田1,046町余、畑2,861町余、男1人流死(宇和島領) 三津川口湊神社高潮のために破損(松山領)
	8. 11-12	洪水にて伊予郡下高柳村の土手100間つぶれる。(松山領) 大洲地方大洪水(大洲領)、強雨損所あり。(宇和島領)
" 4(1784)	8	夏以来諸社において氣候順行の御祈禱度々行ふ。(松山領)
	2. 18	疫病流行につき和靈社にて御祈禱を実施する。(宇和島領)
	5. 28	郷中水損、田450町余、畑88町余(宇和島領)
" 5(1785)	6. 24	洪水、畔屋村(広見町)男2人流死
	" 27	疫病流行につき公儀より薬法書仰せ出される。
	5. ~7.	雨きわめて少ない。各地で潤雨御祈禱を実施する。(宇和島領) 当夏干ばつ田畑不熟、植え残りの田方多い。(松山領) 植付け時候おくれる。夏中所々にて毎度雨乞い祈禱あり。(松山領)
" 6(1786)	12. 17	川之石浦家数170軒焼失する。(宇和島領) 8カ村立見引方89俵、流田1797俵余立見引き
	2. 3	穴井浦家数226軒焼失する。(宇和島領)
	4. ?	伊方浦家数104軒焼失する。(宇和島領)
	7. 2	止雨祭を行う。(大洲領)
	7. 18	天気順よく蝗なきよう御祈禱(宇和島領)
	8. 1-2	津島方洪水、下灘浦にて山崩れ5人死亡、遊子谷村(城川町)男1人流死。(宇和島領)
	8. 29	強風雨洪水、高潮(宇和島領)
" 7(1787)	9. 6	大風雨洪水(宇和島領)、8月~9月の洪水で田599町余、畑339町余破損(宇和島領)
	3. 21	洪水 田3町余、畑3町余破損 麦作大凶作(宇和島領)
	4. 25	洪水 田799町余、畑364町余破損、山崩れ 遊子浦3人、九島1人奥浦6人死亡(宇和島領)、肱川洪水(大洲領)
	6. 24	御荘・山田・多田組のうち洪水、田83町余、畑3町余破損、死人もある。(宇和島領)
	7. 18	御荘・津島 洪水(宇和島領)
" 8(1788)	8. 12-13	大雨洪水のため田畑大破 前代未聞の大災である。この損毛田畑12,873石余、男2人流死(宇和島領)
	3. 24	洪水(宇和島領)
	5.18-6.14	追々大雨洪水 田33町余、畑17町余破損(宇和島領)
	6. 23	諸社において止雨祭御祈禱を実施する。(松山領)
	7. 16-	追々洪水、田286町余、畑34町余破損(宇和島領)

三天明飢饉

洪水の頻発

安永一〇年(天)四月に天明と改元されたが、この年は天候は平穩に推移した。しかし翌二年は、表5-81にあるように田植時期の五月四日を最初として、七月三日、同一七日、同一二二-二三日、

八月一九-二〇日の五度にわたり、主として南予地方を襲った大風雨がであった。このうち八月の洪水は、宇和島領内に三、九〇〇町余の被害を与えたが、この七三割は畑方が占め、この中には江戸中期以降耕地化された段畑が多数含まれていたものと思われる。

天明三年には浅間山の噴火があり、東北地方はこの影響を受けて大冷害の年であった。浅間山の噴火の状況は、「信州浅間山六月末より焼懸り、団砂等降り大石落ち大鳴動、おびただしく死人あり大麥の由申し来る」(「記録書

拔」として八月一四日宇和島藩に伝えられている。この年は伊予でも冷夏で、松山領内ではたびたび気候順行の祈禱を行った(老番日記呼出)。同年八月一―一二日には豪雨があつて、重信川下流南岸の梅檀投樋門付近は堤防が一〇〇間余(約一〇メートル)にわたつて決壊し、出穂期の稲に大被害をおよぼした。

同四年は一月一日に松山城天守閣が落雷で焼失した。二―三月にかけて伊予は阿波と共に疫病(風)が流行して、宇和島藩でも和霊神社で祈禱を行った。翌五年は雨の多かった天明年間としては特異な年で、春から夏にかけて極めて雨の少ない干ばつの年であつた。風早郡では稲の植付け不能の水田もあつた。この年の一二月から翌六年四月にかけて、焼失戸数一〇〇戸以上の大火が川之石・穴井・伊方の各浦で発生した。この年は梅雨から引き続いた夏の長雨で、大洲藩では止雨祭を執行している。この後八月に二回、九月にも暴風雨があつて、宇和島領内ではウシカによる損毛も加わつて特に被害が大きかつた。

天明七年(一七七)は春の多雨と豪雨で、表は決定的な不作であつた。稲作は四・六・七・八月の四回の豪雨で大きな被害をうけ、特に八月一二日の洪水は、「前代未聞の大災」とあつて被害は大きかつたことがわかる。

第二節 災害と飢饉

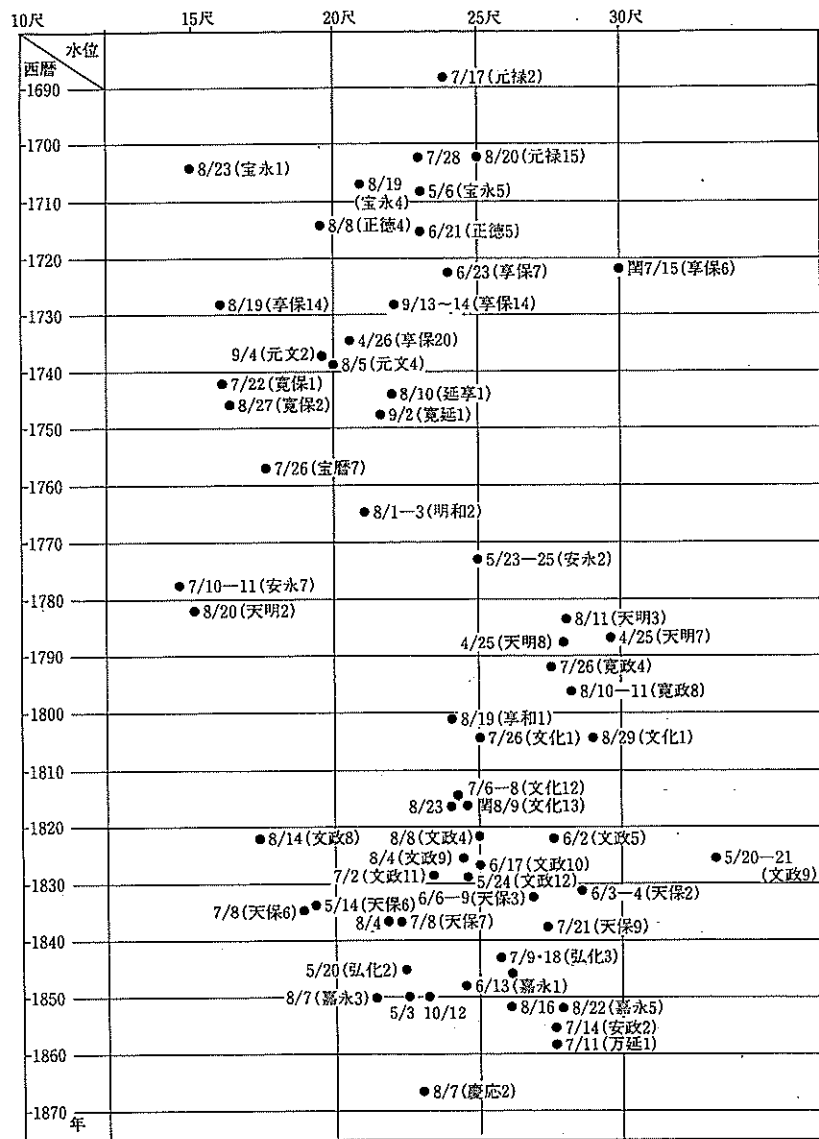
四 天保飢饉

霖雨と冷夏

天保飢饉は、全国的には天保四年(二五三)から八年までとされているが、伊予の場合同二年(一〇年)としなければならない。天保二年は春以来多雨で、宇和島藩では、気候順行、天気回復の祈禱を行っていた。このため麦も不作で、さらに六月四日には豪雨がかった(表五―83)。同三年は六月三日(九日)まで豪雨のあと一転して雨が降らず八月上旬まで大干ばつが続ぎ、宇和島・大洲・新谷・西条領等では被害が大きかった。

天保四年は六月中旬の土用入り直前までは天候も比較的順調であったが、下旬以後は冷夏、さらに秋の長雨が続いたので田畑とも実入りが悪かった。翌五年には八月六日に東予方面で洪水があったが、冷夏の続いた天保年間としては珍しく稲作に都合がよかった。六年には大洲で、五月一四・二一日および七月八日と三回の豪雨がかった。七年は春の長雨の反面、梅雨期には雨が少なかった。しかし、六月の土用入りころから雨天と冷夏が続ぎ、

第二節 災害と飢饉



(「府県別年別災害志」「愛媛県気象史料」「愛媛社会経済年表」による)

注) 平常水位の上昇分を示す。なお月日は新暦に換算していない。

図5-26 肱川の出水量

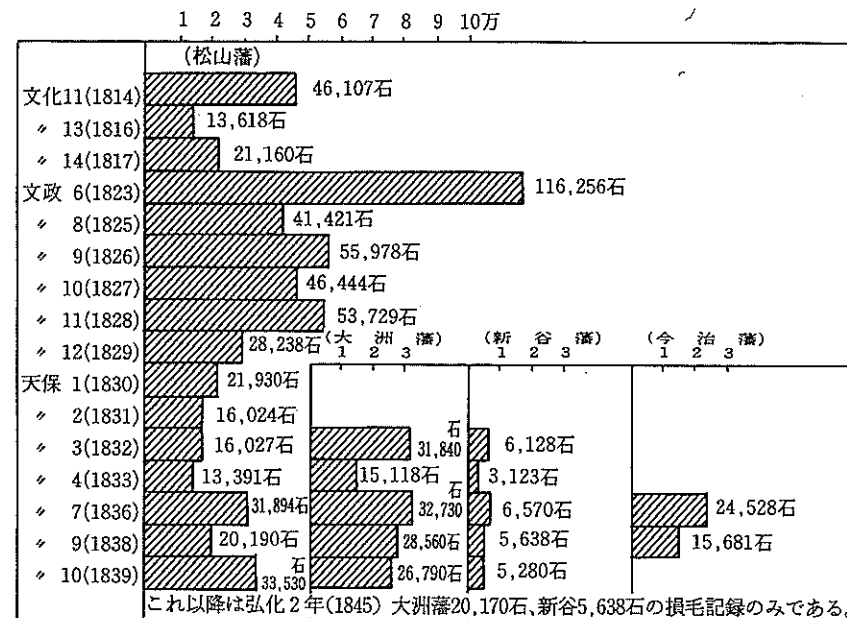
表5-83 天保飢饉の災害

年次	月日	災害
天保2(1831)	5. 20	春以来多雨、麦作に被害、快晴氣候順行の祈禱を和霊神社で実施する。大雨で夏作不作(大洲領中島)
" 3(1832)	6. 4	大風雨、宇和島領内田畑620町7反余流田・水押し。
	6. 3~9	豪雨、田畑流失(大洲領)
	7~8. 9	大旱ばつ(大洲領)
" 4(1833)	夏	宇和島領内干ばつ、各神社において雨乞祈禱する。物成引方3,752俵。大干ばつにつき稲作はじめ、大豆・田芋・唐芋など大不作(西条領)
	冬	痘瘡流行(大洲領中島)
" 5(1834)	夏~秋	6月下旬より氣候不順で冷気、8月中旬より雨続き、冷気、田畑とも実入悪し(大洲・新谷領)
	8. 6	宇和島領物成引き方3,333俵7升余
" 6(1835)	5. 14	西条・小松領洪水の被害が大きい。
" 7(1836)	7. 8	} 大風雨(大洲領)
	5	
	6	
	7. 6	
" 8(1837)	8. 3	} 大洲領
	8. 4	
	8上旬	
	8	
	10. 17~18	
" 9(1838)	春~夏	春から長雨、梅雨期雨少ない 土用入り後雨天続く
	夏	今治領疫病流行、死者多し。(今治領) 去秋作ならびに当夏・麦作とも引続き不熟(松山領湯山)
" 10(1839)	7. 21~23	稲作植付時分多雨不熟(今治藩) 土用中氣候不順、田畑虫気あり、この日強雨(大洲領)
	7. 28	雨天多く快晴御祈禱仰せつけられる。(宇和島領)
	6~7	干ばつ、7月20日如法寺河原で千人踊・雨乞いをする。(大洲領)

七月六・八日、八月三・四日と豪雨があって、これ以降も雨天がちであった。このため稲作・畑作ともに実入りが悪く、各藩とも大凶作となった。同八年は麦が不作、同九年も夏に多雨と低温が続き、同一〇年は干ばつによる不作であった。また疫病は天保元年宇和島領内で、同八年は今治で流行した。

図五—26は元禄二年(六五)から江戸時代末まで、肱川洪水(一四尺以上)の際水位の上昇分を明示したものである。このうちほぼ二〇尺(六メートル)以上の場合、城下町大洲も浸水したものと推測される。この水位の図からも明らかのように、天明飢饉を含む天明寛政期、天保飢饉を含む文政天保期、幕末の弘化安政期にかけて、洪水の際特に高水位が集中していることがわかる。

天明飢饉以後における伊予各藩の損毛状況を判明分について図五



図五—27 近世末期の伊予各藩損毛高(文化11年~天保10年)